東京・水戸藩徳川家小石川屋敷跡・駿河小島藩松平家屋敷跡・播磨安志藩小笠原家屋敷跡（春日町遺跡第Ⅲ・Ⅳ地点）

1　所在地　東京都文京区春日一丁目

2　調査期間　第Ⅲ地点　一九九一年（平3）一〇月～一九九三年三月、第Ⅳ地点　一九九六年八月～二〇〇〇年三月

3　発掘機関　文京区遺跡調査会（文京区教育委員会）

4　調査担当者　加藤元信

（東京西北部・東京東北部）

5　遺跡の種類　遺物散布地・大名屋敷跡

6　遺跡の年代　縄文時代・弥生時代・奈良時代・平安時代・近世

7　遺跡及び木簡出土遺構の概要

本調査は、文京区役所庁舎（文京シビックセンター）ならびに、施設（文京シビックホール）建設に伴うもので、庁舎建設範囲（第Ⅲ地点）と施設建設範囲（第Ⅳ地点）とに分けて実施した。第Ⅲ地点の南側が水戸徳川家の小石川屋敷跡に、第Ⅲ地点の北側と第Ⅳ地点の西側が播磨安志藩小笠原家の屋敷跡に、そして第Ⅳ地点の東側が駿河小島藩松平家の屋敷跡にあたる。

水戸徳川家は家康第一一子の頼房を藩祖とする。小石川の屋敷地は寛永六年（一六二九）当初は中屋敷として拝領され、明暦三年（一六五七）の大火を契機として、それまで江戸城内の松原小路（現在の吹上御所付近）に所在していた上屋敷を、ここに移したとされる。

播磨安志藩小笠原家は、清和源氏加賀美遠光を遠祖とする譜代大名である。鎌倉時代末期に信濃国守護となった貞宗をはじめ、武家礼法（小笠原流）の家として知られる。享保元年（一七一六）に無嗣廃絶となったが、先祖の功労が考慮され、同年中に小笠原長興に一万石が与えられ、立藩した。所領地には居城を持たず、陣屋のみが設けられた。

駿河小島藩松平家は、元禄二年（一六八九）に松平（滝脇）信孝が加増を受けて一万石の石高となり、大名として立藩したが、所領地には居城を持たず、陣屋のみが設けられた。安永・天明年間の家臣、倉橋格は「恋川春町」の筆名で『金々先生栄花夢』や『鸚鵡返文武二道』などの黄表紙を執筆したことでも知られている。因みにこの

筆名は、小石川・春日町をもじったものといわれている。

本誌第二二・二六号で報告したとおり、本遺跡は、小石川をはじめとする複数の河川が、周辺地域の洪積台地を浸食・開析して合流し、「小石川大沼」と呼ばれる広大な湿地帯を形成していた地域に所在する。これまでの水戸徳川家小石川屋敷跡の調査では、縄文時代前期を嚆矢とする、複数度にわたる海進・海退の痕跡と、主として古墳時代以降に本格的に行なわれた水稲耕作の痕跡が、採取土壌の自然科学分析によって明らかにされている。こうした地形的環境（沖積低地）を屋敷地とするにあたり、人為的な客土・整地が行なわれている。整地が実施された具体的な時期については明確にし得ないが、おそらくは水戸家が当該地域に屋敷地を拝領した寛永六年以前に当該地域に所在していた浄土宗本妙寺その他の屋敷地の造営前後のことと考えられる。

木簡をはじめとする多数の木製品（漆器・生活雑器類）と陶磁器類・金属製品（煙管ほか）は、主に第Ⅲ地点の発掘調査で出土している。陶器の中には水戸徳川家が屋敷地を拝領した寛永六年よりも古いものも比較的多く含まれていることから、水戸家あるいは、それ以前の本妙寺の造営の時期などに、脆弱な地盤を人為的に整地するにあたり土砂中に破損した陶磁器類を廃棄したか、もしくは文献などにたびたび記されている洪水の際に、流失した土砂に多量の陶磁器類が混在した可能性などが挙げられる。

木簡は、いずれも遺構に伴うものではなく、第Ⅲ地点の包含層及び表土の遺物である。(1)～(11)は水戸徳川家屋敷跡、(12)は安志藩小笠原家屋敷跡から出土した。

水戸徳川家の江戸屋敷内部の空間構成については、絵図資料などが限定されており詳細は明らかではない。関連遺跡の調査で確認された遺構群などから、屋敷の空間構成を復原してゆく必要があることは言うまでもなく、関係資料との比較を含めて今後の検討課題である。

8　木簡の釈文・内容

包含層

(1)　「納豆
　　勝魚六　　径191×厚4　061

(2)　「□□
　　□□□　　径99×厚9　061

(3)　「□□
　　□□□□　　径88×厚4　061

(4)　・「○　□□□□
　　・「○□□□□□　　(102)×(18)×3　081

(5)
・る十□□
・□□□□　(99)×11×3　081

(6)
「□商売人□□□□
□□□□□□□」　142×54×6　061

(7)
「たい一まい
□□□□□□　メ」　215×26×2　011

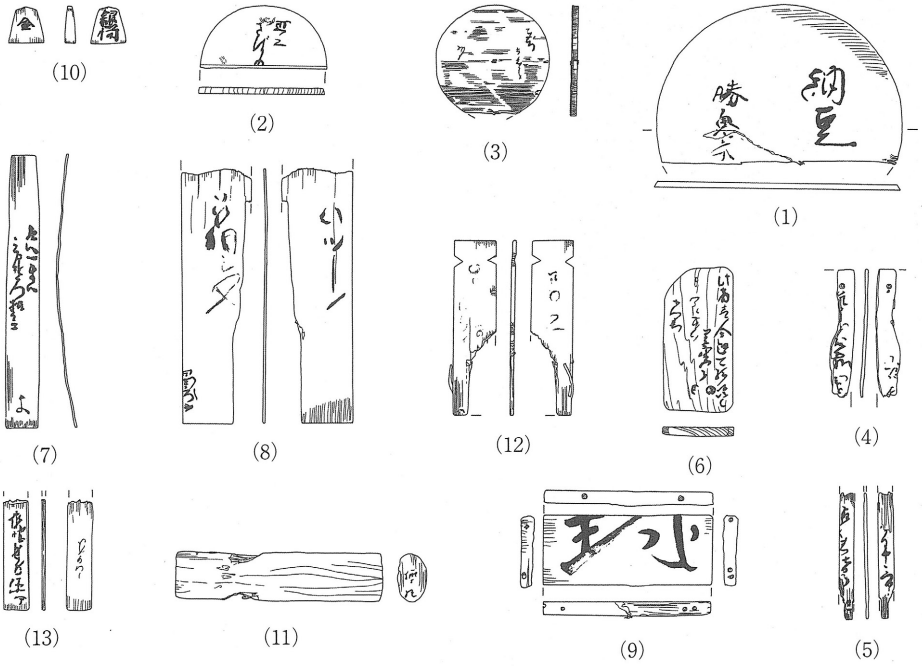
(8)
・いツ□□　」
・□□□□□
□□□□」　(203)×49×2　081

(9)
〔封カ〕
□」　55×132×11　061

(10)
・「銀将」
・「金　」　29×28×5　061

(11)
「□□」　長161×長径37×短径24　061

(12)
・「V□□□□□」
・「V□□□□□」　137×32×3　032



表土

(13)　・　の□□　」

・□□□□生ア」　(99)×30×2　019

(1)～(3)は曲物容器の蓋板。(1)のように食材に関わる内容をもつものが含まれることから、出土地点付近に水戸徳川家の厨房施設が存在していた可能性を指摘できる。(9)は二次的に整形されており、文字の上端は切れている。(10)は将棋の駒、(11)は刀子の鞘尻に墨書したものである。

9　関係文献

文京区役所・文京区遺跡調査会『春日町遺跡第Ⅲ・Ⅳ地点―文京区役所庁舎等建設に伴う発掘調査報告書』(文京区埋蔵文化財調査報告書二〇、二〇〇〇年)

(加藤元信)